総評 2023 年 10 月分　杉本真維子

「にっぽんの夜で一番光ってる／場所は塾です星座を描き」詩央えみる（大阪府）
一生のうちで経験する、もっとも熱量がつまっている場所が、塾なのかもしれません。夜学のかがやきがしみます。

「光を束ねたよ／うなレタスを／持ち帰　る／部屋／一人ぐらしの」立花ばとん（東京都）
一人暮らしの四角い部屋にまるいレタスが持ち込まれる。そのときに生じる違和感は誰（何）が所有するものなのでしょう。レタス、部屋、語り手が対等に並んでいて面白いです。

「どんぐりが／頬に落ちると痛いこと／知っているからやさしくなれる」こはくいろ（大阪府）
かわいらしいどんぐりも、おもさをもつ限り、ときには人を傷つけるものとなる。痛みから現実への通路が見いだされています。

「ガラ空きの電車みたいな人が好き」橋詰　桜京（東京都）
ほっとしてからだの力が緩むあの感じに気づかされました。多忙な日々のなかでは印象に残りにくい一瞬の安らぎです。心の細部にもっと注意を払おうという気持ちになります。

「眠るとき／瞼は少し明いていて／姦淫を火にたとえてくれる」大嶋　碧月（兵庫県）
「明」の字の使用から火のまぶしさが垣間見えます。それはおのれを焼き尽しかねないほどの内なる火であり、生のすがたかもしれません。ここにあるものはまぎれもなく詩のかけらだと思います。

「翌日に刺す通り魔が今日に逃げ／今日とは今日である他はない」大嶋　碧月（兵庫県）
ニュースを見ていてときどき思います。罪を犯し連行されるそのひとも、その前日は罪を犯していないひとだったのだと。今テレビを見ている私と同じ側にいたひとだったのだと。「今日とは今日である他はない」とはそういうことなのだと思いました。他人事なんてどこにもないんですね。

「橋の上競馬に負けた人影も／川に映れば自然にかえる」土居　尚子（東京都）
作者は観察力に長けたかたでしょう。人を捉えつつ、人そのものではなく、人影のほうを辛抱強く追っています。流されない独自の視野を持っています。

「信号が変わるのを待つ僕たちの／待つこと以外は異なる人生」源楓香（東京都）
信号待ち、踏み切り待ち、エレベーターのなか…。公共の場所に生まれる束の間の運命共同体を捉えています。それはとりもなおさず私たちすべてが地球という巨大な船に乗りこんだ船員であることを示唆します。

「シャンプーを／こぼさず詰め替えるように／言葉を選んでも殴られる」羽水繭（大阪府）
シャンプーを容器に詰め替えているときは誰もが「善人」だ、という意味のことを以前どなたかが書いていて、ふとそれを思い出しました。しかしそのようなつつましさをもって

しても「殴られる」とは、その酷さを率直に伝えています。

「沃野にて情事を手放し僕らは／〈草刈りボラ〉さ古城の石垣」スズキセーホン（千葉県）
「〈草刈りボラ〉」のあっけらかんとした音と字面が効いています。高く澄み切った秋空から「僕ら」を俯瞰するような大きなまなざしがあります。

「そして、一篇の詩を生むために／私は、わたしを処刑する」coolman23（青森県）
詩作の一つの本質がここにあります。ちなみに、書くためには生きていかなくてはならないわけですから、その矛盾のバランスを体得することも力のうちかもしれません。

「びいどろを吹いて吸う咲く草の花」杢いう子（佐賀県）
「口」がみっつもつづきます。草の花はすずらんでしょうか。白くてぷうとふくらんだ花びらとびいどろのかたちが重なって、そこにつややかな子どものほっぺたも映り込むよう。まぶしいです。

「１粒だけ剥いた葡萄に貼る切手」付玉 薄荷（埼玉県）
一房の葡萄がたちまち文字のない葉書になります。その大胆なイメージの描線が頼もしいと思います。

「掃除機をかけて床で読む歌集／ソファーに全部の夏服がある」うろ仔（北海道）
絵画的に美しく仕切られた時空。自室も一つの宇宙です。

「水はけの悪いこころにつく足跡」雲理そら（大阪府）
心と土地の内的親和性を発見しています。水はけの悪い場所のさまを観察することで、おのれの心のぬかるみを知ることができるかもしれません。

次回も楽しみにお待ちしています。